

J. A. フェツフェル画『スイス地方の衣裳のコレクション； 或いはスイス・チューリヒ地方の様々な服装』

Schweizerisches Trachten-Cabinet oder allerhand Kleidungen, wie man solche in dem löblichen Schweizer-Canton Zürich zutragen pflegt, von Johann Andreas Pfeffel. ca1750.

司書三課長 守屋 靖子

本書は、18世紀初頭におけるスイスのチューリヒ地方の様々な服装が描かれた銅版画集^{※1)}である。標題に続いて20枚の図版で構成され、それぞれ右上に図版番号、脚部にドイツ語とフランス語の解説が記されている。

収録されている図版は、以下の通りである。

①市庁舎に向かう議員 ②司祭 ③普段着で散歩する紳士 ④教会や街に出かける市民 ⑤普段着の受験生と学生 ⑥街や市場に買い物に行く農夫 ⑦畑で鋤をかついでいる農夫の息子 ⑧教会に行く貴族の女性 ⑨喪服を着た女性 ⑩教会に行く市民 ⑪子供に洗礼を受けさせるために教会に行く若い女性 ⑫子供に洗礼を受けさせた後、家に連れて帰る若い女性 ⑬礼拝用の衣服を着た若い女性 ⑭晴れ着を着た女性 ⑮愛娘と二人連れの女性 ⑯婦人や若い女性の乗馬服 ⑰散歩服の若い女性 ⑱庭で編物をする女性 ⑲召使 ⑳田舎から街に買い物に出かける娘と二人連れの農婦

以上男性6枚、女性14枚の多様な服装を紹介している。

描かれている人物の服装は、宗教服・宮廷服(司祭・貴族)、市民服(職業服・制服・式服・スポーツ服)で構成されている。

更に、これらの衣服は普段着、作業着、外出着(母子)、晴れ着(女性)、学生服、喪服、散歩服、乗馬服、礼拝用の服装などで、司祭と貴族を除いては、庶民の服装が中心となっている。とりわけ帽子はいずれもユニークで、チューリヒ地方の民俗色豊かで特徴のあるデザインである。

脚部の解説には、登場人物の職業、服飾などの特徴が簡潔に記され、図版は細部まで緻密に描かれ、筆勢はのびやかで品格にあふれている。

背後に描き込まれた情景も巧みで、建物や街路をはじめ、織物組合、鍛冶屋、弓の練習場、公衆

浴場など当時の生活ぶりを窺い知る事が出来る。

チューリヒ地方におけるこの時代の服装は、ルイ14世第3期の影響を受け、市民の服装は帽子から靴に至るまで17世紀から18世紀初頭にかけてのフランスの服装に類似している。

当時を代表する婦人、および紳士服の特徴は、概ね次の2図に象徴されよう。

図1に見る「教会や街に出かける市民の服装」は、1690年代におけるフランスの宮廷服を取り入れた裕福な市民のスタイルである。ダブルリットはベスト(胴着)に、ジストコールはアビ(長上着)に変化した時代を反映している。

長上着、ウエストコート(長胴着)は膝丈になり、ウエストラインの位置でぴったりと絞られ、



図1 教会や街に出かける市民の服装

前の打合せ、ベスト、カフス、ポケット等に多数のボタンホールを作り、ボタンで飾っている。袖付きの長胴着は長上着のカフスの上に折り返され、シャツの手首にはフリルが付けられた。長上着と長胴着の襟は長いかつらを付けるため襟なしになり、ゆったりとしたシャツは垂れ襟で、のちにローンやレース製のクラバットへ移行するきっかけとなった。

長胴着と対に着用する半ズボンの裾は、長い靴下の中に入れ、膝下で留めるのが習慣であった。

16世紀から流行している毛皮のマフは、リボンで飾り、ウエストに巻いたりベルトに付けて冬に着用されたが、のちに羽毛、絹など刺繍を施した豪華でおしゃれなものに発展している。

帽子は、トリコルヌと呼ばれる端を巻き上げた三角帽をかぶり、剣は装飾用の長剣を使用した。長剣は、長胴着の下に飾り紐で取り付け、長上着の裾の空いた部分から見えるように吊るした。

靴は黒が多く(狩猟時は茶)、つま先は四角にカットされ、舌革が付いている。



Habit des Freres und Singsern zu Pferd. L'Habit des Femmes et des filles à cheval. Habitudes au Duché de Saxe bei der Copulation etc. qui est d'usage dans les Esclaves des noces et des mariages.

図2 婦人や若い女性の乗馬服

図2は「婦人や若い女性の乗馬服」の図でサブタイトルには「結婚式や結婚の披露宴には着用する習慣となっている」とある。

婦人用の乗馬服は、長上着・長胴着などの紳士服が基底となっている。長上着は、襟なしで前打合せ・ポケット・袖口の大きなカフスのボタンホール、袖口のフリルも紳士服と共通するデザインとなっている。ステインケルクは17世紀末フランスで流行したスカーフの一種で、レースやローンが使用され、両端をよじてボタンホールの中に入れて使用した。

スカートは、横乗りで鞍の上に垂れかかるほど十分にゆとりを入れたデザインで、トリコルヌ(三角帽)には大きなリボンが付いている。フォンタンジユ^{注2)}のキャップに付けられたような長いリボンは前で結んだり、後ろに流してアクセサリーとして使用した。

画家J. A. フェツフェルは、1715年に銅版画家の息子として誕生した。画商でもあった父親はウィーンアカデミーに所属し、建築、装飾文様など多くの芸術的な挿絵を制作した。中でもシヨイヒツァー聖書の刊行は、父フェツフェルの偉業と評されている。

フェツフェルは、父親の後継者として肖像画、風景画等の銅版画家として活躍した。また、シヨイヒツァー聖書の刊行にも携わり、1768年に53歳でアウクスブルクにおいて死去した。

尚、本書はB.ピカール画「 sacrament 教会における洗礼式の図」(Administration du Sacrement de baptesme, Inventé par B. Picard.) (K383.134-P) 等、図版22枚の合綴書である。

注1) 判型はクラインフォリオ判(25×38cm)で、バラムの装丁であったことが窺えるが、背・角以外はマーブル紙で補修され原形をとどめていない。標題はドイツ語とフランス語で記され、著者名・書名・出版地等の記載はあるが、刊行年はなく、ヒラー等の書誌によれば1750年頃の刊行とされている。

注2) 17世紀末から18世紀初頭にヨーロッパで流行した婦人のキャップの一種。フォンタンジユ夫人が愛用したことからその名前が付けられた。

参考文献: The mode in costume, by R. Turner Wilcox, New York, Charles Scribner, 1948. (383.1-W)